ヒマラヤの麓の結婚行列

ネパール　青年海外協力隊 長谷川隆 1983 年

純白の馬に乗る花嫁。標高 1,900m。山道を 7 時間の結婚行列。花婿の村人が連れ添う。

ピーパパパードンドン、昼夜を問わず結婚行列の太鼓や金管楽器のけたたましい演奏が山々に響き渡る。ここは東ネパール・コシ県ボジプール郡。標高 600m から 2300m の大丘陵地帯。車の通るダランの町まで出るには、文字通り山越え谷越え 2 日間まるまる歩かねばならない。15 年も前は、カトマンズのパシュパティナート寺院に巡礼に行くのに片道 13 日間かけて標高 2 千 m の山々を何度か超えて行ったと下宿のお婆ちゃんは言っていた。

今月はマンシール月（11 月中旬から 12 月中旬）の 11 月下旬。1 年に結婚してよい月としてはならない月とがヒンズー教で決められている。今月は稲刈り収穫作業も終えた農民たちにとって、喜びと安らぎの時で、全国的に 1 年のうちでも結婚最盛期。

太鼓や金管楽器をけたたましく鳴らしながら結婚行列は行く。

右の写真：右から、私の馬、花婿の村ピャウリで果樹苗木を育成する大地主、私、馬子、地主の使用人と弟さん。

私が参加した結婚行列は、私の指導する柑橘苗木屋のある村の村長さんの長男の結婚式のもの。花婿 19 歳、花嫁 16 歳。まず花婿の村の男衆 70 人くらいと花婿が、花嫁の家にやってきていた。ネパールでは同じカースト（階級）間で、そして親によって縁談は決められる。その花嫁の家に 2 泊して、夜もいろいろな儀式が華やかに執り行われ、いよいよ今日は花嫁を連れての行進だ。

朝 10 時頃、チョータラという大きな樹の下で待っているとやってきた。ドンドンパーパパー、金の冠と深紅の衣装の花嫁は純白の馬に乗せられて、まだ幼さの残る顔に不安と緊張の表情いっぱいにやってくる。先頭の演奏するグループは私を日本人と知ると、どうだこれを一つ吹いてみろ、鳴らしてみろと大騒ぎ。そして行進は標高 1500m から 1000m の谷へ、さらに 1900m の丘陵まで急な登りだ。

ここの頂上のムラバリという所に紅茶、酒、飯、煙草で一服する茶屋があり、今来た長い行程も丸見えでいい景色。この先さらに行くと、雄姿輝くヒマラヤを仰いでの行進。足下は絶壁、時に霧がサーッと流れ、対する山肌には散々と農家の家々が見える。行き交う人によれば、今日通る結婚行列は三つ目という。こうして行列はヒマラヤを仰ぎ、四方の山々を見渡し、林の鳥のさえずりを聞き、山羊、牛、水牛の群れに会い、楽器を奏でて行進を続けるのだ。そして夕焼けの日暮れ時とうとう花婿の村、ピャウレに到着。

村の女衆も集まっていて、より演奏も盛大に。そして何人かが陽気に踊り出した。今晩は女衆のみが近所から呼ばれ、ごちそうがもてなされた。菜類と漬物、ごはん、豆スープだけ。酒はこのカーストは飲まない。一室に花嫁、花婿の座が設けられ、訪問者は額や頭に米粒、赤い粉で祝いの儀式をし、硬貨を与えた。夜は私も仲間に入り、囲炉裏端で火を囲み女衆と談笑した。

翌朝いよいよ村の男衆が呼び出され、山羊が一頭首を落とされ、すぐに料理。前庭にむしろが敷かれ、葉で作った皿が並べられ、客はそこに座を占める。むしろにあぐらをかき、何十人も輪になって、手で食事を口に運ぶ。肉だけでごちそうなのだ。

この後、2－3 回結婚式に呼ばれたが、いずれも田圃に丸座になって人々が座ると、給仕がより、葉っぱの皿にワシヅカミにご飯、肉が運ばれた。ただ食べ、食べ終えると解散する。なかには花嫁が 2 日間歩いて来たものもあった。

こうして花嫁は、その村に根づくのである。

ボジプールの田植え風景。　30 人ほどの女性が一斉に植える。男は耕す仕事。田植えと稲刈りの時期には結婚式はなく、その後の月に一斉に結婚式が行われる。

稲刈りは家族そろって

秋のティハールの祭り

1 年中炒って食べるトウモロコシ